

談話室

第 12 回 固体・表面光化学討論会

山下 弘巳

大阪府立大学工学部応用化学科 593 堺市学園町 1-1

(1994 年 1 月 17 日受付)

The 12th Symposium on Photochemistry of Solids and Surfaces

Hiromi YAMASHITA

Department of Applied Chemistry, College of Engineering, University of Osaka Prefecture
Gakuen-cho 1-1, Sakai, Osaka 593

(Received January 17, 1994)

第 12 回 固体・表面光化学討論会が平成 5 年 11 月 25 日（木）、26 日（金）の 2 日間、白鷺の舞う堺市にある大阪府立大学の学術交流会館で、日本化学会が主催し光化学協会・触媒学会・電気化学協会・日本表面科学会の共催で開催されました。

この討論会は昭和 56 年に始まり、毎年開かれておりましたが、討論会の対象と目的は、「無機および有機の固体（単結晶、多結晶、微粒子、薄膜、コロイド、超微粒子、LB 膜、二分子膜、固定化化合物、ミセル、高分子、アモルファス、クラスター、フラーレン (C_{60}) などを含む)、およびこれらの表面（界面）の関与する不均一系光化学一般、固体光化学、界面光化学、光触媒、光 CVD、光電気化学、高分子光化学、生物光化学、太陽エネルギーの光化学的変換・貯蔵、光情報記録材料などの境界領域に関するこれら光化学現象を“固体・表面の関与”という統一的立場から討論する。」となっております。今回もこの看板の下に、固体および表面の関与する光化学について、多彩な内容の発表と活発な討論が行われました。

今回（世話人：安保正一（阪府大工））は講演申込件数、参加人数ともに多く、1 件の特別講演と 48 件の一般講演が行われ、全国からの討論会参加者は約 100 名（うち学生約 30 名）に及びました。会場が地下鉄御堂筋

線沿線で大阪市内中心から約 30 分と地理的に便利なことも幸いしたかもしれません、このように盛大な会になったのは、研究領域が着実に発展し、多くの注目を受けるようになっていくことの現れであります。

特別講演では、藤嶋 昭先生（東大工）に「光機能材料と界面光光学」という演題で、光が関与する界面化学反応の基礎および応用に関する最近のホットな話題と“機能光光学”が目標すべき夢を熱く語っていただきました。特に若い研究者には大いに励みになる有意義な内容がありました。

一般講演の内容を大まかに分類すると、固体表面での吸着種や表面光反応・状態に関するもの 5 件；不均一系での光ダイナミクスに関するもの 4 件；包接系などの光反応に関するもの 3 件；光電流、表面電位など光電気化学に関するもの 9 件；LB 膜系の光物理化学に関するものの 3 件；無機・無機-有機薄膜の形成と光物性の評価に関するもの 4 件；超微粒子などの発光に関するもの 4 件；光触媒に関するもの 12 件ありました。地球環境保全の関心が高い近頃の情勢を反映してか、光触媒関連の発表が多いように思われました。

恒例の懇親会は、会場を学術会館の多目的ホールからサロンに移して行われ、約 40 名の参加がありました。事務局の佐藤弘保先生（三重大工）の開会のご挨拶に続き、窪川 裕先生（阪府大名誉教授）、富永 健先生（東大理）から討論会発展の祝いと励ましのご挨拶をいただいたのち、大いに盛り上がり懇親の実を上げました。次回は、山本雅英先生（京大工）のお世話で、第 1 回討論会（世話人：羽田 宏先生（京大名誉教授））が行われた建都 1200 年の京都にて開催されることが確認され、一次会は散会されました。

本討論会では、それぞれが専門分野をもちながら、光・固体・界面のキーワードに共通の接点をもつ研究者が集まっています。このため他の研究者の発表や参加者のコメントが、自分の研究を進めていくうえの大きなヒントになる場合が多く、その意味でも討論会参加者のメリットは大きいと思われます。昨今の光学材料の目覚ましい進歩と地球環境への関心から、光・固体・界面の分野への注目はより急速に高まりつつあります。この分野を担う本討論会が今後ますます発展することを確信しつつ、この報告を終わらせていただきます。